

西日本豪雨により倉敷市真備町地区で浸水被害に遭った福祉・医療関係者が、被災した高齢者や障害者をサポートする「お互いさまセンターまび」(真備町箭田)は今年、開設から1年がた

った。主に送迎や相談に取り組んできたが、新たに生活再建の手助けもスタート。支援側には精神障害者も加わり、被災者同士の支え合いを続けている。

(山内悠記子)

「お互いさまセンターまび」開設1年

被災者同士支え合う

センターは、被災して生活環境が変わり、車やバスでの移動が難しくなった知的・精神・身体障害者や65歳以上の高齢者を対象に、孤立を防ぐ狙いで開設。70、80代を

高齢者、障害者送迎1706件 生活再建支援も開始



中心に同町地区内外で暮らす145人(10月末現在)が登録している。

スタッフは5人。移動支援では車3台を駆使して住まいから目的地まで送迎する。自宅の様子を見に行ったり、買い物や病院に連れて行ったりと、実績は1年間で1706件に上った。

瀬崎弘子さん(41)＝真



被災した高齢者の自宅周辺の掃除を行う山田さん

開設から1年を迎えた「お互いさまセンターまび」の事務所

ズーム お互いさまセンターまび 2
018年11月、倉敷市真備町地区の福祉・医療機関など約20団体でつくる「真備地区関係機関・事業所等連絡会」(真備連絡会)が開設。助成金を活用した運営は5月、真備連絡会を母体に設立された一般社団法人

人「お互いさま・まびラボ」に引き継がれた。登録者は送迎(ガソリン代は実費)や生活支援(15分1000円)が受けられる。活動は月々土曜の午前9時〜午後5時。問い合わせは同センター(090-4655-1150)。

るか、不安を抱える高齢者が増えている」と話す。生活支援も始めた。センターの利用者の要望に合わせ、家具の移動・運び出し、神障害者の自立を支援する。庭掃除など力仕事のため、NPO法人「岡山マインド」の作業所に移ったのを機に、作業所利用者が約10人もスタッフの一員として汗を流す。

被災家屋周辺の掃除を担当する山田博さん(57)＝同町箭田＝は「仕事は張り合いが出るし、被災者同士で助け合えるのもうれしい」と意欲を燃やす。

センターを運営する「お互いさま・まびラボ」の多田伸志副代表は「自分から助けの声を上げられない人にまで利用が行き届いているか課題はある」とした上で、「災害で多くの高齢者や障害者を救った地区の教訓として、誰も置いてきぼりにしないまちづくりに向け、息の長い取り組みにしたい」と話す。